14．1995年から1999年までの世界柔道選手権大会のポイント獲得傾向

—性別と階級別の比較—

鹿屋体育大学　中村　勇
ミキハウス　田辺陽子
仙台大学　南條充寿
文教大学女子短期大学部　楢崎教子

14．Analysis of Winning Points in World Senior Judo Championships from 1995 to 1999.

— Comparison in Terms of Gender and Weight Category —

Isamu Nakamura (National Institute of Sports and Fitness in Kanoya)
Yoko Tanabe (Mikihouse)
Mitsutoshi Nanjo (Sendai University)
Noriko Narazaki (Women's College in Bunkyo University)

Abstract

The purpose of this study was to clarify the current trends in international judo competitions by analyzing the 1995 through 1999 World Senior Judo Championships. The official records of these championships were statistically processed so that winning scores, winning techniques, and winning technique groups could be compared between genders and among weight categories. The results showed *ippon* was the major score and *nage-waza* was the major winning technique. The use of *katame-waza* was relatively less in all groups. This reflected the current trend of *ippon* and dynamic judo promoted by the International Judo Federation. However, women tended to earn relatively lower scores such as *koka*, *chui*, *shido*, and *kinsa*, while men received higher ones like *ippon*, *hansoku-make*, and *keikoku*. Also, women tended to win by *osaekomi-waza* and men by *te-waza*. Men favored powerful *nage-waza* such as *sukui-nage* and *kata-guruma*, which were unpopular among women. There were some significant values found in several weight categories. The heaviest weight category for both women and men tended to use less *te-waza*. However, further study is needed with more subjects in order to draw any decisive conclusions.

I. 緒言

2001年7月末にドイツ国ミュンヘン市で開催された世界柔道選手権大会（以後世界選手権）は88の国と地域から総勢586人の出場選手を迎えた大規模なものとなった[14]。この大会では日本の田村亮子の5連覇や阿武教子の3連覇、井上康生の2連覇など常連選手の活躍もあった一方、チュニジア、イラン、そして北朝鮮から初めて金メダリストが誕生するなど新興勢力の台頭も目立った。特にチュニジアの金メダルはアフリカ大陸初[6]ということもあり、国際柔道連盟（以後IJF）設立50周年のこの年に行われた国際柔道史上意味のある大会であったといえる。

世界選手権が初めて開催されたのが1956年、以後2001年まで男子は22回、女子は12回開催されてきた。この間国際柔道の発展に伴い競技方法や審判方法が大きく変わってきた。特に近年のIJFではお互い組み合って積極的に攻め合うダイナミックな柔道を目標にして、以下にみるような審判ルールやスポーツルールの頻繁な改定が行われてきている。

まず1990年に「教育的指導」を廃止し、相手に組ませなかったり罰則をねらうような「消極的柔道（ネガティブ柔道）」に対する罰則強化、柔道衣サイズ基準の変更による組めない小さな柔道衣の排除[15]などが行われた。1994年には試合場外に出たり出したりした場合の罰則を「注意」に統一しこの反則行為に対し厳しい姿勢をとる一方、場内外の定義を変え試合場をより広く使えるようにした[15]。当時の海外柔道の特徴として「朽木倒」や「肩車」の技術向上やそれらの連絡技の多用、「掬投」や「裏投」などの力技の流行などが指摘されている[9,19]。このころから袖、襟や奥襟を片手だけでつかんで施技するスタイルの海外強豪選手が目立つようになり[5,19]、1995年千葉世界選手権（95年大会）で日本選手が不振に終わった一因としてこうしたスタイルへの対策の不十分さがあったとの指摘がでた[24]。また1995年は「浮固」「裏固」といった当時新しく出てきた「抑込技」のスタイルを正式に採用すると共に次オリンピック大会へ向けて出場資格制度が新たに導入された[15]。

1997年パリ世界選手権大会（以後97年大会）は8m×8mと規格上最小限の試合場サイズで開催され[7]、以降2000年シドニーオリンピックを含めて2001年ミュンヘン大会（以後01年大会）までのIJF主催大会には全てこのサイズが採用されている。この97年大会は無差別決勝戦を含む重要局面で誤審や不可解な判定があったり[12]、罰則適用の早さから「反則で勝敗をつける傾向」[21]が強い点が問題視されるなど特に審判全体について注目が集まった大会であった。またこの年決定された青色柔道衣着用は翌年ワールドカップ国別対抗団体戦から施行された[15]。

翌1998年にはこの大会の反省を受けて審判に関する多くの改定が実施された。袖口を絞り握るいわゆる「ピストルグリップ」の禁止、「標準的な組み方」の定義を定めそれ以外の組み方の制限など特に組み手に関する罰則の強化を行っている[23]。また当時問題化していた厚さや硬さを補強し組みにくくした柔道衣への対策[22]、「積極的戦意に欠ける場合」の罰則について自動的に双方の選手に与えることなく攻防の状況を判断しなければならないとする通達[15]、抑込時間の短縮、「抑込技」定義の明確化と「裏固」の廃止[15,23]、男女体重区分の変更[25]など選手強化策に直接関わる重要事項が決定した。その他IJFトップの審判養成制度の更新、審判員を監督する陪審員（ジュリー）制度導入など様々な面で審判制度に手を加えている[7,13,21]。その他前年IJF総会で決定した青色柔道衣使用を開始した年でもあった。

翌年の1999年バーミンガム世界選手権大会（以後99年大会）はこれらの審判改定施行後初めて開催されたIJF大会であったが、選手による罰則狙いの戦術や審判員の罰則重視姿勢が減り積極的な攻防がみられるようになったとする評価が得られた[3,18,22]。

近年は世界のトップレベル選手数が増え、また実力が伯仲してきている[22]。世界選手権におけ

るメダル獲得国数も男子は1996年アトランタオリンピックまでは最大16カ国／地域であったが、97年大会で男子18カ国、99年大会で男子20カ国、01年大会では男子21カ国と増加してきた[16]一方、女子は第1回大会（1980年）の10カ国、続いての1982年大会の11カ国以降13－15カ国[8]とほとんど変化せずヨーロッパに集中している。しかし近年はその中でも各国勢力に変化がみられているうえ、他大陸の日本とキューバの2強が台頭するなど勢力に変化がみられている[26]。

このように90年代以降ルールや競技方法の改定や国際柔道界の勢力圏拡大によって国際競技柔道の状況は大きく様変わりしてきていると考えられる。全日本の強化現場ではこのような変化に敏感に対応するため、積極的な海外遠征を行うことで選手やコーチらが直接海外柔道スタイルを肌で体験するようにしている。さらに毎年世界の主要国際大会をビデオ収録したものを元に海外ライバル選手の分析を行っている。こういったビデオ分析は統計処理された数値ではなく選手やコーチ自身が生の映像を見て行っているが、柔道の場合選手個々や対戦相手の特性によって対戦スタイルが変わり、また詳細な対戦情報は数値化できない部分があるためである。

一方で主要国際大会での競技傾向分析を行った学術的研究も多く報告されている。古くは1980年に竹内らが行った嘉納治五郎杯国際柔道大会の研究がある。これは施技数、決まり技、防御法や組み方の種類について分析している[15]。世界選手権については1981年大会に関する尾形らの研究[5]、高橋らの1993年大会と1995年大会の分析[20]などが行われているが、1995年以降の大会についての研究はほとんど見あたらず、特に女子については国際大会自体の資料が少ないのが現状である。競技柔道では男女で強化体制や指導者が異なる場合が多く、また体力面や一部ルール（試合時間）にも異なる部分があり調査する上で別個に対応する必要があると考えられる。また体重差による現行階級システムでは階級ごとに競技特性が異なることが予想される。柔道において実際の現場での競技力向上策へ反映させる競技傾向分析を行う場合、このように性差や階級差といった選手特性で分類して検討することが必要と考えられる。

このため本研究では1995年、1997年、1999年の3回の世界選手権について性別および階級別にみた競技傾向を分析することで、近年における国際競技柔道の傾向の一端を明らかにすることを目的とした。

II．方法

1．対象試合と試合記録

1995年千葉世界選手権、1997年パリ世界選手権、および1999年バーミンガム世界選手権3大会の男女全階級の全試合を対象とした。これらの大会の公式記録データベースから、記録に不備のあるもの、また「棄権勝」や「不戦勝」を除いたものを用いた。対象となる大会、開催地、分析試合数および入賞国を表1に示した。

2．分析方法

対象試合を選手の性と体重別階級の選手特性で分類し、性別比較では勝利ポイント、勝利ポイント獲得内容種類、および勝利ポイント獲得内容の3項目、階級別比較では勝利ポイント獲得内容を除く2項目について検討した。これらの用語の定義については以下に示す。

・勝利ポイント：「一本」「有効」「指導」「僅差」など最終的な勝敗を決定した得点
・勝利ポイント獲得内容種類：勝利ポイントを獲得した内容を「投技」「罰則」などの種類で示し、技の場合は「手技」「抑込技」など
・勝利ポイント獲得内容：勝利ポイントを獲得した具体的な内容で投技や固技で決した場合はその技名、罰則なら犯した禁止事項

表１　対象世界選手権とメダル獲得国
Table 1　List of subject Championships and medal-awarded countries

Year Location	1995 Chiba				1997 Paris				1999 Birmingham			
Number of contests	815				739				763			
Medal-won countries and the number of medals	Female		Male		Female		Male		Female		Male	
	Cuba	7	Japan	8	Japan	5	France	5	Japan	6	Japan	5
	Korea	5	Russia	4	France	4	Japan	5	Cuba	6	Turkey	3
	China	3	France	4	Cuba	4	Korea	3	France	3	Korea	3
	Netherlands	3	Korea	3	Spain	3	Poland	2	Great Britain	3	Russia	2
	Japan	2	Georgia	2	Belgium	3	Georgia	2	China	2	Cuba	2
	Belgium	2	Germany	2	Korea	3	Brazil	2	Belgium	2	Netherlands	2
	France	2	Turkey	2	China	2	Belgium	2	Spain	2	Georgia	2
	Poland	2	Belarus	1	DPR Korea	2	Germany	1	Poland	1	Great Britain	1
	Argentina	1	Italy	1	Great Britain	1	DPR Korea	1	Netherlands	1	France	1
	Great Britain	1	USA	1	Germany	1	Russia	1	Korea	1	USA	1
	Brazil	1	Israel	1	Switzerland	1	Latvia	1	Italy	1	Estonia	1
	Portugal	1	Austria	1	Poland	1	Austria	1	Germany	1	Moldova	1
	USA	1	Canada	1	Italy	1	Romania	1	DPR Korea	1	Uzbekistan	1
	Ukraine	1	Poland	1	Brazil	1	USA	1	Czech Republic	1	Belgium	1
							Netherlands	1	Bulgaria	1	Brazil	1
							China	1			Canada	1
							Moldova	1			China	1
							Italia	1			Belarus	1
											Romania	1
											DPR Korea	1

また99年大会から新規体重区分が実施されたが、95年大会と97年大会の階級も対応する新階級に表記を統一した。

各選手特性と勝利ポイント、勝利ポイント獲得内容種類、勝利ポイント獲得内容の関係をそれぞれクロス表にまとめ χ^2 検定を用いて有意な差違の有無を検証し、５％水準以下の危険率で有意差がみられた場合さらに残差分析を行った。

III. 結果

１．性別による比較

(1) 勝利ポイント

表２は性別にみた勝利ポイントを示した表である。まず男女総合してみると「一本勝ち」が54.4％と過半数を占め、「合わせ技」や「総合勝ち」を含めると全試合の６割以上にあたることがわかる。続いて「有効」「僅差」「技あり」の順に多く、最も少ないのが「総合勝ち」であった。性別でみた場合男女ともに「一本勝ち」が圧倒的に多く他ポイントを圧倒していた。その中で男子が女子より「一本勝ち」の割合が高く、「有効」「効果」は女子が有意に多かった。禁止事項に対する罰則については男子で「反則負け」による勝利（以後「反則負け」）と「警告」が、女子では「注意」「指導」が顕著に多かった。また「僅差」は女子の方に多く男子の約２倍強みられたことも明らかになった。

男子は技評価、罰則とも比較的大きなポイントで勝敗を決する傾向があるのに対し、女子は比較的ポイント差が小さいか、「僅差」で決まる試合が多いことが明らかとなった。

(2) 勝利ポイント獲得内容種類

表３では勝利ポイント獲得内容種類を比較した。まず男女総合してみると「投技」が全体の

表２　性別にみた勝利ポイント
Table 2　Distribution of winning scores by gender

Score	Female	(%)	Male	(%)	Total	(%)
Total	996	(100.0)	1321	(100.0)	2317	(100.0)
Ippon	488	(49.0)	773	(58.5)*	1261	(54.4)
Awase-waza	66	(6.6)	89	(6.7)	155	(6.7)
Sogo-gachi	7	(0.7)	22	(1.7)	29	(1.3)
Waza-ari	70	(7.0)	89	(6.7)	159	(6.9)
Yuko	123	(12.4)	116	(8.8)	239	(10.3)
Koka	47	(4.7)*	26	(2.0)	73	(3.2)
Hansoku-make	7	(0.7)	45	(3.4)*	52	(2.2)
Keikoku	18	(1.8)	48	(3.6)*	66	(2.9)
Chui	41	(4.1)*	29	(2.2)	70	(3.0)
Shido	29	(2.9)*	13	(1.0)	42	(1.8)
Kinsa	100	(10.0)*	71	(5.4)	171	(7.4)

*:significant value (P<0.05)

表３　性別にみた勝利ポイント獲得内容種類
Table 3　Distribution of technique groups by gender

	Score	Female	(%)	Male	(%)	Total	(%)
	Total	996	(100.0)	1321	(100.0)	2317	(100.0)
Nage-waza	Subtotal	573	(57.5)	872	(66.0)*	1445	(62.4)
	Te-waza	173	(17.4)	302	(22.9)*	475	(20.5)
	Koshi-waza	82	(8.2)	102	(7.7)	184	(7.9)
	Ashi-waza	256	(25.7)	338	(25.6)	594	(25.6)
	Sutemi-waza	62	(6.2)	130	(9.8)*	192	(8.3)
Katame-waza	Subtotal	226	(22.7)*	231	(17.5)	457	(19.7)
	Osaekomi-waza	171	(17.2)*	157	(11.9)	328	(14.2)
	Shime-waza	25	(2.5)	34	(2.6)	59	(2.5)
	Kansetsu-waza	30	(3.0)	40	(3.0)	70	(3.0)
	Penalties	97	(9.7)	147	(11.1)	244	(10.5)
	Kinsa	100	(10.0)*	71	(5.4)	171	(7.4)

*:significant value (P<0.05)

62.4％を占め、「固技」や「罰則」を大きく上まわっている。最も使用頻度が高かったのが「足技」、続いて「手技」「抑込技」であった。性別にみても男女とも同様の傾向にあったが、女子は男子に比べて「固技」特に「抑込技」が多く、男子は「投技」特に「手技」の割合が高いことがわかった。「罰則」や「僅差」の発生頻度について男女差はみられなかった。

(3) 勝利ポイント獲得内容

表４では勝利ポイント獲得内容についての比較を行い女子の上位30位の順に示した。女子では「僅差」が最も多く全体の10.0％を占め、続いて「投技」の「内股」、「積極的戦意の欠如による罰則」、「横四方固」、「背負投」の順であった。一方、男子は「内股」が最も多く、「積極的戦意の欠如」「背負投」「僅差」「掬投」の順に多かった。女子では「横四方固」「上四方固」「袈裟固」「縦

表4　性別にみた主な勝利ポイント獲得内容とその順位
Table 4　Distribution of frequently used techniques by gender

	Female		Male	
	%	Ranking	%	Ranking
Kinsa	10.04	1 *	5.37	4
Uchimata	8.33	2	9.24	1
Non-comvativity	6.73	3	7.57	2
Yoko-shiho-gatame	6.43	4 *	3.48	8
Seoi-nage	6.02	5	5.53	3
Ouchi-gari	5.22	6	4.16	7
Harai-goshi	3.61	7	2.95	9
Osoto-gari	3.01	8	2.57	13
Kami-shiho-gatame	2.91	9	2.50	14
Juji-gatame	2.91	9	2.88	10
Kouchi-gari	2.61	11	1.97	18
Kesa-gatame	2.61	11	1.97	18
Tate-shiho-gatame	2.41	13 *	0.68	33
Harai-makikomi	2.41	13	1.36	23
Tai-otoshi	2.21	15	2.80	11
Sukui-nage	2.21	15	4.62	5 *
Ippon-seoi-nage	2.21	15	2.20	15
Tani-otoshi	2.11	18	2.73	12
Kosoto-gake	1.81	19	2.20	15
Kuchiki-taoshi	1.71	20	0.83	32
Morote-gari	1.51	21	1.14	26
Kuzure-kesa-gatame	1.51	21	1.59	21
Ura-nage	1.31	23	2.12	17
Sode-tsurikomi-goshi	1.10	24	1.21	25
Okuri-ashi-harai	1.10	24	1.51	22
De-ashi-harai	1.10	24	1.14	26
Out-of-bounds	0.90	27	0.45	39
Kosoto-gari	0.80	28	1.29	24
False attack	0.80	28	0.68	33
Sumi-gaeshi	0.70	30	1.06	28
Sasae-tsurikomi-ashi	0.70	30	0.91	29
Kata-guruma	0.60	32	4.50	6 *
Total number	996		1321	

*:significant value (P<0.05)

四方固」などの「固技」が男子に比べて比較的上位に現れたのに対し、男子で多かった「掬投」「肩車」が有意に少なかった。特に「肩車」については3大会で0.6%とほとんど使用されておらず、男子との差が非常に大きかった。

2　階級別による比較

(1) 勝利ポイント

表5では男女の体重別階級で分けた勝利ポイントについて階級ごとの割合を示した。男女の全階級において「一本勝ち」が最も多く全ての男子階級、女子階級では－48kg級と＋78kg級と無差別で過半数に達した。女子では－57kg級で「技あり」、－63kg級で「指導」が、無差別では「総合勝ち」が有意に多く、男子は－100kg級で「警告」、＋100kg級で「反則負け」が有意に多かった。

表5　階級別にみた勝利ポイント

Table 5　Distribution of winning scores by weight category

	Category	Female							
		-48kg	-52kg	-57kg	-63kg	-70kg	-78kg	+78kg	W Open
	No. of Contest	148	140	141	142	131	117	92	85
Score(%)	Ippon	50.7	49.3	47.5	47.2	46.6	43.6	52.2	58.8
	Awase-waza	7.4	5.7	2.8	9.9	5.3	7.7	7.6	7.1
	Sogo-gachi	0.7	0.0	0.0	0.7	0.0	0.9	1.1	3.5*
	Waza-ari	6.8	10.0	12.1*	6.3	5.3	7.7	1.1	3.5
	Yuko	10.1	12.1	12.8	12.7	17.6	12.0	9.8	10.6
	Koka	5.4	5.0	3.6	3.5	8.4	4.3	5.4	1.2
	Hansoku-make	0.0	0.0	0.0	1.4	1.5	0.9	2.2	0.0
	Keikoku	1.4	2.9	0.0	1.4	2.3	2.6	4.4	0.0
	Chui	4.1	5.7	3.6	2.8	4.6	3.4	2.2	7.1
	Shido	0.0	2.1	5.7	6.3*	1.5	3.4	1.1	2.4
	Kinsa	13.5	7.1	12.1	7.8	6.9	13.7	13.0	5.9
	Category	male							
		-60kg	-66kg	-73kg	-81kg	-90kg	-100kg	+100kg	M Open
	No. of Contest	180	186	185	190	162	138	145	135
Score(%)	Ippon	58.3	55.9	56.2	56.8	63.6	55.8	65.5	57.0
	Awase-waza	8.3	7.0	9.7	3.7	3.7	6.5	3.5	11.9
	Sogo-gachi	1.1	1.6	0.5	3.2	1.9	1.5	0.7	3.0
	Waza-ari	8.9	7.5	6.5	10.0	6.2	7.3	3.5	2.2
	Yuko	7.8	12.9	10.3	9.5	5.6	8.0*	7.6	7.4
	Koka	1.7	2.2	2.7	2.1	3.1	2.2	0.0	1.5
	Hansoku-make	1.7	1.6	2.2	2.6	3.7	2.2	9.0*	5.9
	Keikoku	1.1	1.6	3.8	4.2	3.7	8.0	4.8	3.0
	Chui	1.7	3.2	1.1	3.2	1.9	0.7	1.4	4.4
	Shido	1.1	0.5	0.0	2.1	0.6	1.5	1.4	0.7
	Kinsa	8.3	5.9	7.0	2.6	6.2	6.5	2.8	3.0

*:significant value (P<0.05)

表6　階級別にみた勝利ポイント獲得内容種類

Table 6　Distribution of technique group by weight category

	Category	Female							
		-48kg	-52kg	-57kg	-63kg	-70kg	-78kg	+78kg	W Open
	No. of Contest	128	130	124	131	122	101	80	80
Technique group(%)	Subtotal	59.5	60.7	56.7	58.5	64.9	56.4	42.4 #	55.3
	Te-waza	21.6	23.6	12.8	19.7	15.3	13.7	6.5-	23.5
	Koshi-waza	10.1	5.0	10.6	12.0	3.8	9.4	7.6	5.9
	Ashi-waza	23.0	27.1	27.0	20.4	37.4*	27.4	20.7	20.0
	Sutemi-waza	4.7	5.0	6.4	6.3	8.4	6.0	7.6	5.9
	Subtotal	20.9	21.4	22.0	21.8	18.3	19.7	33.7	29.4
	Osaekomi-waza	16.9	13.6	16.3	14.8	12.2	13.7	31.5 #	25.9
	Shime-waza	3.4	3.6	2.8	2.8	3.1	1.7	1.1*	0.0
	Kansetsu-waza	0.7	4.3	2.8	4.2	3.1	4.3	1.1	3.5
	Penalties	6.1	10.7	9.2	12.0	9.9	10.3	10.9	9.4
	Kinsa	13.5	7.1	12.1	7.7	6.9	13.7	13.0	5.9
	Category	male							
		-60kg	-66kg	-73kg	-81kg	-90kg	-100kg	+100kg	M Open
	No. of Contest	165	175	172	185	152	129	141	131
Technique group(%)	Subtotal	65.0	72.0	65.4	67.9	70.4	60.1	60.7	63.7
	Te-waza	33.3	24.2	27.0	26.3	24.7	16.7	10.3-	14.1-
	Koshi-waza	5.0	5.9	5.4	5.3	11.1	9.4	10.3	11.9
	Ashi-waza	18.9	30.6	24.9	25.3	22.8	25.4	30.3	27.4
	Sutemi-waza	7.8	11.3	8.1	11.1	11.7	8.7	9.7	10.4
	Subtotal	20.0	14.5	20.5	16.3	13.0	19.6	19.3	17.0
	Osaekomi-waza	10.0	11.3	13.5	8.4	11.1	10.9	15.9	15.6
	Shime-waza	5.0	3.2	3.2	3.2	0.6	2.2	1.4	0.7
	Kansetsu-waza	5.0	0.0-	3.8	4.7	1.2	6.5*	2.1	0.7
	Penalties	6.7	7.5	7.0	13.2	10.5	13.8	17.2	16.3
	Kinsa	8.3	5.9	7.0	2.6	6.2	6.5	2.8	3.0

*:significantly greater (P<0.05) than other categories
-:significantly smaller (P<0.05) than other categories

(2) 勝利ポイント獲得内容種類

表6では階級別に勝利ポイント獲得内容種類について各階級ごとの割合を検討した。

女子の－70kg級で「足技」、＋78kg級で「抑込技」が顕著に多く「手技」が少ない傾向が、男子では「手技」が－60kg級で多く＋100kg級と無差別で少なく、「関節技」は－100kg級で多く－66kg級で少なかった。また有意な違いは得られなかったが男子の－73kg級までの軽い階級ではそれ以上の重い階級より罰則による勝利が比較的少ない傾向がみられた。

Ⅳ．考察

1．性別にみた勝利ポイント獲得傾向

一般に男子より筋力的に劣り重心位置の低い女子[8]は、投技では「一本勝ち」などの大きなポイントで勝敗を決しにくく、「固技」と連携する場合が多いといわれる[28]。本研究で女子が「一本勝ち」が少なく「有効」や「効果」といった小さなポイントの割合が高いことや「僅差」が多い理由の一因であろう。また男子に多くみられる「掬投」や「肩車」といった相手を持ち上げて投げる系統の力技は女子ではあまりポイント取得に用いられていないことも判明した。にもかかわらず「一本勝ち」が最も多いのは「横四方固」「上四方固」「腕挫十字固」などが上位に現れているのは、「固技」によるところが大きい可能性が示唆される。

罰則によるポイントも女子は軽い罰則で、また男子は重い罰則で勝敗が決する傾向がみられたが、この罰則はどちらも「積極的戦意の欠如」に対するものがほとんどであることは表4が示している。初回は「指導」となるこの罰則だが女子では累積されにくいのに対し、男子では「警告」や「反則負け」に達するまで累積され続ける傾向があり、しかもそれらがどちらか一方の選手のみに与えられ勝敗を決定づける場合が多いと推測できる。

2．階級別にみた勝利ポイント獲得傾向

勝利ポイントやその獲得内容について顕著な特徴がみられた階級もあった。しかしほとんどはある特定の階級のみに出現していて、体重差が近い隣接階級に類似傾向がみられないことから、体重や体格の違いに起因する現象ではなくむしろその階級ごとの強豪選手の競技スタイルを反映している可能性がある。今回世界選手権3大会の分析では各階級の試合数が80試合から185試合と少なく、出場大会や試合数も多く、また勝利ポイント獲得総数も多い強豪選手の影響が比較的及びやすい可能性がある。今後対象大会数を増やしてさらに検討する必要がある。

今回の研究では男女とも最重量級で「手技」が少ない傾向がみられたが、これは「背負投」「肩車」「掬投」など相手の下に潜り込んだり持ち上げて投げる技はこの階級ではなじみにくい傾向を示唆している。しかし男子の場合無差別でも同じ傾向であったのに対し、有意な違いではないが女子の無差別で逆の現象がみられたが、これは近年女子重量級では中国の袁華やキューバのベルトラン、日本の二宮など「背負投」や「体落」を用いる強豪選手がいることが影響しているかもしれない。

3．最近の世界選手権の競技傾向

過去に行われた世界選手権男子試合の競技傾向の研究では、「一本勝ち」の割合は1975年大会では47.0%、1987年大会で44.0%であったが、1991年大会では62.0%、1993年大会では59.0%と90年代に入って増加している[18]が、本研究でも男子は58.5%であり、男女合わせても54.4%と近年の傾向と合致している。この現象について1990年の柔道衣サイズ基準の大型化できちんと組み合って積極的に攻防する傾向が強くなったこと[18]に加え、1995年以降の特に組み手に関する一連のルール改定や海外選手の技術レベル向上で一層その傾向が進展した[18,22,27]と考えられる。そ

の一方で「一本勝ち」を中心に技評価の基準が甘くなる傾向や罰則を与えすぎる傾向が弊害として現れてきているという指摘もある[2,10,15,17]。技評価基準の甘さについてはIJFでも認識しており審判セミナーなどを通じて指導している[4]。

近年はみておもしろいダイナミックな柔道を重要視するあまり、寝技の攻防も表面上の進展がみられない場合すぐ「待て」が宣告されるケースが増えておりIJFなども寝技軽視の傾向を問題視している[10]。過去の男子試合の研究では1975年に「抑込技」が全決まり技の29.0％を占めたのを筆頭に1995年以前は主要な決まり技であったと報告されている[18]。今回は男子の「固技」は17.5％うち抑込技は11.9％、女子は22.7％と17.2％、合計して19.7％と14.2％と少なかった。その中でも女子に「抑込技」が比較的多かったが女子の強化における「固技」の重要性を示唆している。

また本研究での罰則による勝利は男女合わせて10.5％と全体の１割を占めた。世界選手権での罰則についての調査はこれまでほとんど行われておらず資料に乏しいが、近年罰則によって勝敗が決まることが増えていることは多くの国際強化関係者が指摘している[2,17,18,21]。今回は特に男子で重い罰則がでる傾向がみられたがこの理由については今後標本数を増やすなどさらに検討していく必要がある。

得点の優劣がつかない僅差判定は1987年大会と1989年大会では各階級15.0－19.0％で特に1987年大会＋78kg級で36％であったのが、1991年大会と1993年大会は男子全体で9.0％となり減少している[6]。この変化はちょうど「一本勝ち」増加の開始時期と重なっており柔道衣サイズの改定、主に「ネガティブ柔道」に対してのルール強化と積極的な適用、甘い技評価基準などの影響によるものと考えられる。今回は全体で7.4％、女子では10.0％、男子は5.4％であった。また僅差判定が多かった階級は－48kg級、－57kg級、－78kg級、＋78kg級などが12－13％台で後は男女とも１桁台であった。特に＋100kg級や男子無差別などは3.0％以下で１大会１試合程度しか発生していないことになり、例えば無差別団体戦向けに負けない柔道スタイルを身につけてきた国内重量級男子選手などは、海外の攻撃的柔道スタイルや罰則や技評価の適用の違いに苦慮すると考えられる。

４．まとめ

1990年以降国際競技柔道はルール改定や海外諸国の強化などの影響で大きく変わってきたといわれる。今回は1995年から1999年までの３つの世界選手権大会の公式記録を元に、勝利ポイント、勝利ポイント獲得内容種類、勝利ポイント獲得内容について選手の性別と階級別に比較検討を行った。その結果女子は「効果」「注意」「指導」「僅差」が比較的多く、男子は「一本勝ち」「反則負け」「警告」が多かった。また女子は「固技」特に「抑込技」が多く、男子は「投技」特に「手技」が多く、女子と比べて「掬投」や「肩車」が頻繁に使用されていた。男女の体力差などによりつぶして抑える女子の勝ち方と相手を持ち上げる力技に特徴のある男子の勝ち方の違いが明らかになった。階級別にみた場合今回は観測数が少なく体格の違いによる傾向の違いははっきりと現れなかった。その中で男女とも重い階級で「手技」が少ない傾向がみられた。このように性差や階級差で競技傾向に違いがある、あるいはある可能性が示唆され、今後のさらなる検討が待たれる。また今回の３大会では男女それぞれと全ての階級において「一本勝ち」が多く、「投技」中心で「固技」が比較的少ない傾向が全体にみられたが近年のルールや審判上の傾向を反映していると考えられる。

引用文献

1）張百鋭、射手矢岬、中島裕幸、奥越雄、柔道国際大会における東洋選手と西洋選手の競技内容の比較、柔道科学研究、５、29－35、1997.
2）藤田弘明、大会総評、68、31－32、1997.
3）藤田弘明、大会総評、柔道、70、32－33、1999.
4）「誤審」問題を考える：緊急インタビュージム・コジマIJF審判理事、近代柔道2000年11月号、257、40－41、2000.
5）橋本圭史、ハンガリー国際柔道大会、柔道、65、85－88、1994.
6）射手矢岬、世界柔道選手権、柔道、72、６－23、2001.
7）小俣幸嗣他、詳解柔道のルールと審判法、１，大修館、110－166、2001.
8）目崎登、女性スポーツの医学、１、文光堂、６－９、1997.
9）向井幹博、長期遠征合宿記、柔道、65、70－72、1994.
10）中村良三、IJF理事会報告（その１）、柔道、72、59－64、2001.
11）中村良三、IJF理事会報告（その２）、柔道、72、41－47、2001.
12）二宮和弘、JUDOはどこへいくのか－21世紀に向けてのジャッジメント、全柔連だより、13、２、1998.
13）野瀬清喜、大会観戦記、柔道、70、47－48、1999.
14）Official Results of World Judo Championships in Munich, Germany, International Judo Federation, 2000.
15）尾形敬史他、競技柔道の国際化：カラー柔道衣までの40年、１、不昧堂、83－192、1997.
16）岡田弘隆、全日本柔道の展望、柔道の視点：二一世紀へ向けて－、柔道指導者研究会編、道和書院、164、2000.
17）小野沢弘史、内側から見たシドニー五輪柔道審判事情、近代柔道、22、42、2000.
18）菅波盛雄、競技分析からみた世界柔道選手権大会の推移、柔道の視点－二一世紀へ向けて－、道和書院、131－133、2000.
19）菅原正明他、欧州柔道選手権大会視察、柔道、65、75－83、1994.
20）高橋進他、ルール改正に伴う柔道の技術内容の変化について：世界柔道選手権大会を対象として、柔道科学研究、４、７－13、1996.
21）高野裕光、大会を終えて、柔道、68、36－37、1997.
22）高野裕光、国際試合の現状、柔道の視点－二一世紀へ向けて－、柔道指導者研究会編、道和書院、156－162、2000.
23）鳥海又五郎ら、IJF総会報告、柔道、70、52－56、1999.
24）上村春樹、大会を終えて、柔道、66、39、1995.
25）山口香、世界柔道選手権大会、月刊武道、373、22－27、1997.
26）山口香、全日本女子の未来、柔道の視点－二一世紀へ向けて－、柔道指導者研究会編、道和書院、175－182、2000.
27）吉鷹幸春、世界柔道選手権、柔道、70、５－19、1999.
28）全日本柔道連盟強化委員会科学研究部編、柔道強くなるためのＱ＆Ａ、１、不昧堂、128－129、2000.